

## 新学術領域研究「比較地域大国論」第4班研究会概要（2010年7月）

- 日時：2010年7月10日（土）10時～11時45分
- 場所：北海道大学スラブ研究センター小会議室（401室）
- 報告者：Alexander Morrison (University of Liverpool / SRC)
- 題目：Twin Imperial Disasters: The Invasions of Khiva and Afghanistan in the Russian and British Official Mind, 1839–41

### 1. 報告の趣旨

この研究会では、ロシア領中央アジアと英領インドの比較史を専門とするリヴァプール大学講師・スラブ研究センター外国人研究員のモリソン氏をお招きし、イギリス帝国の第一次アフガン戦争とロシア帝国のヒヴァ遠征という、同じ1839年に始まった中央アジア侵攻の失敗事例をテーマに報告していただいた。本報告は、軍人・外交官・行政官らの公信や回想など豊富な一次史料を使って、両帝国エリートのメンタリティの共通性と相違を検証し、現地人の視点にも限定的ながら言及しており、帝国比較を目的とする第4班としては非常に有意義なものであった。

### 2. 報告の概要

本報告は、1839～41年の英露の中央アジア侵攻の際の意志決定過程を、両国の諜報活動の相互作用と、現地民が提供する情報の扱いに注目しながら分析することを通して、両国の official mind（公職者の思考様式。ロビンソンとギャラガーの用語）の特徴を考察するものである。

英露の主たる失敗要因は、① 中央アジアへの帝国支配をめぐって互いに疑心暗鬼になっていたこと、② 実際に遠征を行うにあたって現地人の意見に十分耳を傾けなかったこと、の2点である。

① イギリスの第一次アフガン戦争は一般に良く知られた事件であり、史料的にも発掘し尽くされた感がある。だが、ソ連崩壊と共に公開されるようになったロシア帝国の史料を見ても、この戦争を正当化するほどの脅威をロシアがイギリスにもたらしていたという証拠は見当たらず、イギリスが如何にロシアを過剰に恐れていたかが良く分かる。

ロンドンとカルカッタがロシアへの警戒心を強めるようになった直接のきっかけは、1813年および26年、ロシアがカージャール朝ペルシアとの戦いで2度にわたって勝利したことである。そして、1837年のカージャール朝によるヘラート（アフガニスタン）攻撃がロシアの後押しによるものと見られたことと、同じ年にロシア軍将校ヴィトケヴィチがアフガニスタンのドースト・ムハンマド・ハーン政権支援のためカーブルに現れたことが、インドに脅威をもたらす動きとしてイギリス人に衝撃を与えた。しかし、実際にロシアがどの程度ヘラート攻撃を支持したかは不明で、少なくともインドへの攻撃の前哨戦として位置づけていたと

は考えられない。ヴィトケヴィチによる工作は、中央政府というよりはオレンブルグ県軍務知事ペロフスキーの指示によるものであったし、本人の自殺によって中途半端に終わった。にもかかわらず、イギリス側では次第に強硬派の意見が強まり、インドをロシアとペルシアの脅威から守るためには緩衝地域に親英政権を確立することが必要と考え、アフガニスタンへの侵攻に踏み切りシャー・シュジャーを王位につけたのである。

他方、ロシアでは1820年代から、交易路の安全確保とロシア人奴隷の解放、イギリスの影響力拡大防止のために、ヒヴァ・ハン国の征服が必要との意見が出ていた。1835年、ペロフスキーは皇帝宛ての覚書を提出し、フランスのアルジェリア征服を引き合いに出しつつ、ヒヴァのロシア皇帝に対する「侮辱的行為」を罰すべきと訴えている。結果としてロシア政府は同国への侵攻を決意したが、行軍経路に当たるカザフ草原での反乱のためしばらく延期し、さらにはイギリスを不必要に刺激しないよう、イギリスがアフガニスタンを占領するのを待ってからヒヴァ遠征を開始した。ヒヴァの内情に関する情報は不十分で、征服したらヒヴァの政権をどうするか、明確な計画はなかった。

② ヒヴァ遠征の失敗は、直接には冬の悪天候によるものだったため、軍事的な失敗の原因がよく調べられなかったが、大きな問題はロジスティクスにあった。ロシア軍は時にカザフ人の抵抗にあいながらも1万頭の駱駝を借り上げ、雪によって水を補給するために冬期の行軍を選択したが、例年にない寒気と大雪・嵐のため、駱駝の約9割が死に、ヒヴァに到達できないまま引き返した。長距離遠征の難しさを知ったロシアは、のちの中央アジア征服では、要塞を作りながら一步一步勢力を広げていくことになる。

これに対しイギリス軍のアフガニスタン遠征は、出発地のパンジャーブが親英的なシク教徒の支配する豊かな地域であったこと、インド人銀行家たちから資金を借りられたことから、手厚いロジスティクスに支えられていた。しかし雨や嵐、荷物の過積載のため駱駝3万頭のうち2万頭以上が死亡したといわれる。また兵士の家族や業者などを連れた無駄の多い行軍だったため、駐留中に物資が足りなくなり、兵による略奪や物価の高騰が現地民の不満を生んだことは、2年後の悲惨な敗走の一因となった。

両軍に共通する失敗原因として挙げられるのは、現地の人々に対し傲慢な態度をとり、彼らの忠告に耳を傾けなかったことである。悪天候だからもう引き返そうというカザフ人の声を、ペロフスキーはぎりぎりまで耳に入れなかった。イギリス人は、アフガニスタンで彼らに対する不満が高まっているというモーハン・ラール（イギリス軍を補佐したカシミール人）の警告を無視した。これは、違いが強調されがちな英露両帝国の共通点を示す例である。

### 3. 質疑応答

以上の報告に対しフロアより多岐にわたる質問が出された。例えば、モリソン氏が自著 (*Russian Rule in Samarkand 1868–1910: A Comparison with British India*) で重要な論点としながら本報告では強調しなかった英露の情報収集能力の違いについては、イギリスの方が情報に長けてはいたが、既に決めた方針に不利な情報はあまり使わなかったとい

う返答であった。そのほか、駱駝などを調達する際の金銭授受の方法（イギリスは銀行ネットワークを使ったが、ロシアは銀で払った）、オスマン帝国・カフカスなど中央アジア以外の地域での英露間の競争との関係や、英露の政治システムの相違（議会制と専制）と失敗パターンに関連性なども話題になった。

（福田宏、宇山智彦）